

国際関係学部長の新里孝一です。原隆一先生のご経歴とご業績についてご紹介いたします。

原隆一先生は、慶應大学大学院を修了後、イラン大使館における専門調査員を経て、1987年に本学に着任されました。以来、30年の長きにわたって、社会学や西アジア地域研究を中心に教鞭をとってこられました。

この間、1994年には『沙漠周縁地域の自然生態環境と社会変動に関する研究』により京都大学から博士号（農学）を授与され、1997年には、主著となる『イランの水と社会』が上梓されました。本書は、農村社会調査の視点から普遍的なイラン社会像を提示した「野心的なイラン社会・文化論」と評価され、国内の西アジア研究者の注目を集めました。原先生のイラン農村社会研究は、現在も、イランの研究者の間で、高い評価を得ています。『イランの水と社会』が、昨年9月に、ペルシア語に翻訳され、テヘランのチャハール・デラフテ社から刊行されたことはその証左にほかなりません。

ところで、1月20日には原先生の最終講義が行われました。奇しくも、同年齢だというトランプ大統領の就任式と重なりました。「アジアとの交わり 50年 大東 30年」というタイトルの下、19歳のときのインド放浪がアジアと交わるきっかけだったこと、専門調査員としてイランに滞在した激動の数年間の体験、そして、ゼミ生との学びや現地研修の思い出が、卒業論文集『チャイハーネ』と現地研修報告『ヴァリキヤラー』をめぐりながら懐かしそうに語られました。

最終講義の終わりに、原先生は、ご自身の研究生活を振り返り「平凡な人間でも、時間をかけて地道にやったものはすぐれているし、後世に残るものになる」。そして、今後の世界を展望しながら「我々は日本人である。アジア人とどう付き合っていくのかをよく考えてもらいたい」と静かに語りかけられました。

最終講義の結びでは、今後の「夢」にも言及されました。最近、お仕事を整理するなかで、50年前にインドを放浪したときの日記を読み、もう一度インド旅行をしてみたいと思うようになったといいます。また、恩師の大野盛雄先生がされたように、日本各地をまわり、日本のことを調べてみたくなったともいいます。アジア研究に専念したこともあり、日本国内をほとんどまわっていないことに気づいたからそうです。

国際関係学部の学生はもとより、教職員一同、原先生のようなすぐれた研究者から、30年にもわたって親しくご指導いただいたことを幸運に思うと同時に、たいへん誇りに思っております。

これからは、インド旅行や日本国内の調査という「夢」を追っていく傍らで、本学名誉教授として、教職員及び学生への変わらぬご指導をお願いする次第です。一層のご活躍とご健康をお祈りいたします。

以上、原隆一先生のご紹介とさせていただきます。ありがとうございました。